

昔々、男と女がいて、3人の子供を儲けた。両親が死んで子供たちは貧しく生きていたが、どうすればいいかわからなかった。彼らは野原に食べるものを探しに出かけた。道すがら、彼らはこの世に存在する無上の喜びについて尋ね合った。長男は、ワインだといい、末っ子は理由を尋ねた。兄は答えた。

「父さんは、酔っては皿を割っているが、いつも、割ったよりも多くの皿を買っている」。

2番目の兄は、それ[無上の喜び]は「嘘」で、お前も言えるからだと言ひ、末っ子は「骨」だと言った。

「父さんは市場に行ったり、旅から帰ってくるといつも骨付き肉を持って帰ってくる。母さんは絶対にそれに触ろうとしないし、父さんは肉を食堂で食べたあと、骨を自分の部屋にしまっておくんだ。母さんはそれを少しだけ味わってから僕らに回ってくる。そして、最後には庭に捨ててしまい、アリたちがそれで家を作るんだ」。

近くにスルタンが住んでいた。スルタンの臣下のひとりが、3人の子供が質問をし合っていると彼に報告した。スルタンは子供たちを連れてくるように命じた。長男は、一番おいしいものは何かと尋ね合っていたと言った。彼はワインの話をし、2番目は嘘、末っ子は骨付き肉のことを話した。

彼らは5年間スルタンの許で別々に働き、会うことはなかった。嘘を喜びとしていた2番目の子はスルタンに、親に会いに行きたいと頼んだ。彼は許しを得てイツァンドラに赴き、大邸宅を建てて飾った。そこには7つの部屋があった。彼は子山羊売りを見つけて言った。

「私は神の番人で、神を呼び起こす者の命を奪う者だ。もしお前が神を見たければ100万フランを私に与えなければならぬ。そうして、お前は神を見るだろう。そこで、神を見なかったなどと嘘をついても得にはならぬぞ」。

子山羊売りは急いで家畜の中から何匹かを売り払い、金を箱に入れて持って来た。彼は家中の部屋を訪れ、最後の7つ目の部屋で眩暈を感じた。そこで、彼は神に会ったという思いに至った。

子山羊売りはスルタンの許に行き、スルタンのかつての使用人で今は神の番人である男について知らせた。するとスルタンは答えた。

「それはいつからか」。

スルタンは彼のお付きと一緒に出かけた。近づくと、番人がスルタンを止めて言った。

「私は神の番人だ。神を呼び起こす者が誰であれ、その命を奪う」。

そこでスルタンは言った。

「神を見ることが出来るだろうか」。

「普通はだめだ。しかし、お前とお前の従者のために例外としよう。ひとり当たり5百万を持ってきなさい」。

更に彼は警告した。

「神を見なかったなどと言う者は親無し子に等しい」。

お付きの者は順番に、すべての部屋を訪れ、7番目の部屋で目が回った。それぞれがスルタンに、神は確かにおられた、と確言した。スルタンも部屋に行き、番人は同じことを伝えた。帰る途中、お付きの中の或る者たちは、何も見なかったが、親無し子として扱われないように、そのことは言わな

かったと白状した。

スルタンは毅然として自分の使用人を待ちうけ、ペテン師に取られた金を回収するつもりだった。帰路で、スルタンは言った。

「お前は嘘つきだ」。

そこで、かつての使用人は答えた。

「最初に会った時に、私はあなたに言ったでしょう。一番おいしいのは嘘で、それは誰でも言えるからだ。その証拠にあなたも信じたでしょう？」。

皆は拍手喝采した。スルタンは心を動かされ、彼をスルタンにした。というのも、自分の使用人の言葉に納得し、それが深い洞察力の証だと知ったからである。